

佐伯独歩会会報

発行責任者 古川 敬



独歩忌によせて 宮明 邦夫

多感な少年時代、独歩は出自欺瞞の衣をまとう「もの

にかかるといふ謎に出会います。その不信感が根底にあつた

おおよそ、人は自らの誕生、存在を無上の喜びとする親の発す

自らの誕生、存在が両親に祝福されたものではなかった

人と関わる時、潔癖症ともいえる正義感を打ちたて、真つ向

この頃の独歩が書き始めた日記に「欺かざるの記」と名付けたこ

彼の初期の作品、特に佐伯を舞台にした処女作の『源叔父』や

判されがちな部分ではあります。独歩は自然を客観的に表現するの

「自らの存在の意味とは」：常に独歩の心の底に流れていた思い



独歩の四季プロジェクト

- 夏 独歩忌をおこなう
秋 読書会・講演会
春 遠行
冬 独歩が聞いた佐伯の音

美しいことと不幸

三股 睦

美しいことは幸か不幸か。汚れを知らぬまま生を終えた六蔵は痛ましく

私は六蔵の好む鳥がみな賢いことが気になつた。六蔵がいつも追いかける鳥は神の使いと言わ

独歩会会長賞を受賞した三股さんに独歩の作品や初めての感想を軽くうかがえたらと思つて

自由な動き回る姿が何故だか窮屈そうに見えた。六蔵は自由であるのに自由でない。「私」は六蔵

秋 読書会・講演会

とき 10月16日(日) 10:30~一般 13:30~高校生
ところ 三余館 大会議室

春 遠行

とき 3月20日(日) 9:30~13:30
ところ 城山周辺 独歩の碑等関連物
花見弁当食後 東光庵の塩釜桜の鑑賞

佐伯独歩会および国木田独歩にかかわるホームページを作成し、全国・世界に佐伯にしかない情報を発信することにしました。

大野先生佐伯市表彰祝賀会 開かる

二月二十六日、山城家におきまして、西嶋市長、田中県議等の臨席をえて、二十名ほどの参加者で、大野先生のこれまでの功労に対して祝賀会を開催しました。



私の最初の就職先は、佐伯豊南高校(現在の市役所の位置に校舎があった)で、その時に小野茂樹先生の『若き日の国木田独歩』を二海堂で買って読み、その内容の素晴らしさに驚きました。

裕 佐伯市中村北町1-12 TEL 0972-22-2917

国木田独歩 佐伯における「自然主義作家」と

『武蔵野』の探究

古市区 木村一郎

佐伯に関係する代表的な人物、自然主義作家の国木田独歩から何かを学びたいと思い、子供の高校時代の教材を二冊参考にした。私自身が、過去、現在と風景写真やワンダーフォーゲルを通じて自然空間大好き人間だからである。

一冊目は大分県高等学校国語教育研究会編 昭和五十九年四版 『総合国語辞典』から。

「佐伯市の塾教師を経て上京。『源叔父』『武蔵野』『運命論者』などの好短編を著し、日本での最初の短編小説家としての地位を得た。初期の浪漫主義的作風から、後、しだいに自然主義的作風に移っていった。人間らしく生きることの許されない民衆に対する愛情が、全期を通じて貫かれている。」抜粋。

『武蔵野』は日記や感想をつづつて、武蔵野の自然美を簡潔清新に、そして情趣豊かに描いた詩的散文で、ツルゲーネフの影響がみられる。徳富蘆花の『自然と人生』と並び称せられるもの。『自然と人生』については後述したい。

『牛肉と馬鈴薯』『牛肉は現実、馬鈴薯は理想をあらわす。理想主義と現実主義を対立させ、結局、現実主義に立つべきことを主張した作品。ワーズワースの影響が見られ、作者の浪漫主義から自然主義への移行を示す作品である。』

二冊目は第一学習社刊 新編日本文学史1995年改訂35版

自然を愛した国木田独歩は、『源叔父』などの散文詩的小説について、詩情豊かな『武蔵野』をはじめ『忘れえぬ人々』『牛肉と馬鈴薯』『運命論者』などで叙情詩人らしい資質を示した。また、晩年には、しだいに人間の運命を凝視する自然主義的傾向を帯びていった。

ところで前記のように国木田独歩は自然主義文学の先駆者と言われ、かつ先駆けとなった佐伯時代の影響が大きいと言われている。わずか一〇ヶ月の滞在中の出来事を『欺かざるの記』に記された、佐伯町在住の出来事を小野茂樹著 アポロン社刊 『佐伯時代の研究 若き日の国木田独歩』に佐伯時代生活譜が記録されていた。自然主義の作家は自然大好きが、必須条件でないかと考え、十ヶ月間の滞在日記をパソコン入力し分析した結果は次表のとおりである。



国木田独歩佐伯時代生活譜のうち自然散策行動別分類

(回数は人日 推定時間は筆者の従事時間の推量で正確な時間ではない)

番号	行動別分類	明治26年10月～12月		明治27年1月～7月		合計	
		回数 (日)	推定時間	回数 (日)	推定時間	回数 (日数)	推定時間
1	城山登山	6回	13時間	9回	23時間	15回	36時間
2	金比羅山(煙草山)	1回	6時間			1回	6時間
	尺間山3回 彦岳1回	3回 1回	34時間			4回	34時間
	元越山	1回	11時間	1回	10時間	2回	21時間
	梅牟礼山			1回	4時間	1回	4時間
	小計	6回	51時間	2回	14時間	8回	65時間
3	海水浴葛港			14回	19時間	14回	19時間
4	番匠川河畔逍遥 舟行	1回	1時間	3回	13時間	4回	14時間
5	佐伯町内散歩 散策	18回	52時間	20回	44時間	38回	96時間
6	南郡 本匠 銚子淵	1回	9時間	1回	10時間	2回	19時間
7	南郡 鶴見 鹿狩3日	3回	22時間			3回	22時間
8	海釣り舟遊 大入島めぐり他	2回	8時間	7回	21時間	9回	29時間
9	柳井津～博多～熊本～阿蘇～竹田～佐伯			1/3 1/13 10日間			船馬徒歩

私の高校入学は現天皇陛下が結婚された年で、入学後二日目ぐらいで休日になったので良く覚えていた。その頃の国語の教科書に徳富蘆花の『自然と人生』の一節、自然に対する五分時「相模灘の落日」が、掲載されていた。はじめての自然文学に接した驚きと感動は、後に、北アルプス、八ヶ岳などの山岳写真や、東京「多摩川」の倶楽部写真展に熱中した先駆けとなったのかもしれない。

幼い頃から、南海部郡の上野村、木立村、上浦町浪太、蒲江町竹の浦河内、米水津村色利、を転々として育ち、上野村の田園風景。浪太の台から見た、豊後水道「水の子灯台」の灯光や月明かり。毎夜七時に通過する日豊線の混合列車のかすかな光。蒲江峠から見た下入津湾の点在する真珠養殖風景。色利の米水津湾の港湾風景や満天の星等が、下地となっていたことは否めない。

私が上京したのは、東京オリンピックの年であった。高度経済成長の始まりであり、各地で建設工事が施行されて、江戸の風景が、次第に失われていた。その頃、写真家の島田謹介『武蔵野』や石井幸之助「武蔵野冬景色」などが、独歩の「武蔵野」を求めて歩き、写真集となった。その後、私は写真倶楽部に所属し、日本大学写真学科名誉教授(文化功労者)の指導を受け、写真のとりことなったのである。同じ頃、職場のワンダーフォーゲル部にも所属し、体力強化、登山技術、登山コース、佐伯にない自然のすばらしさを

体験した。東京では千代田区、文京区、新宿区、渋谷区、中野区等、そして川崎、千葉に勤務し、居住した。独歩の東京での生活拠点とほぼ同じである。佐伯は山水の風景に意外に富み郊外の散歩に至極妙に候と、独歩が、記していることから、上記自然散策行動別分類を作成したものである。

独歩が佐伯に赴任する前の年賦を見ると、千葉県銚子で生まれ、三歳で東京下谷中御徒町、五歳で山口、広島 岩国、山口、十五歳で牛込区早稲田、牛込区若松町など転々と生活をし、二十二歳で佐伯に着任している。行動別分類のとおり二十歳の若さでの行動あるが、体力、気力、知力、は並外れである。自然に対する情熱と文筆による表現力は、幼い頃から育まれた自然環境によるものではないでしょうか。

佐伯町滞在の体験や経験は、さらに新たな展開を生むことになった佐伯の海、川、山、そして良くも悪くも佐伯町民の人情ではなかったかと。

独歩は、鶴谷学館を退職して、徳富蘇峰により設立された民友社に入社している。蘇峰の弟の蘆花が、『不帰』の大成功により文名を高め、民友社入社当時(明治二十二年)から書きためた散文詩『自然と人生』は、同社から明治三十三年八月発行されている。先に一部を述べた『湘南随筆』が最も知られている。自然描写の克明なノートが簡潔な漢語表

現と香り高いロマン性によって賞されている。(ブリタニカ国際大百科事典) 一方、国木田独歩の描いた武蔵野は明治三十一年『今の武蔵野』として民友社の雑誌「国民の友」一月二月に発表され、後に『武蔵野』に改題されている。独歩の日記『欺かざるの記』を種にしたと述べている。又、『武蔵野』の文中表現に「自分が今見る武蔵野の美しさは斯る誇張的の断案を下さしむるほどに自分を動かして居るのである。自分は武蔵野の美と言った、美といはんより寧ろ詩趣といひたい、其方が適切と思はれる。」私のような凡人には美しいと感じることは、あっても詩趣として文章には表現できないのである。島田謹介写真集『武蔵野』は昭和三十一年暮らしの手帖社より発行されたものである。白黒写真83景。作者は朝日新聞社の写真部を退職後に、独歩の『武蔵野』を採って撮影し、その写真集のあとがきの文章もすばらしく、その文頭を引用させて頂きたい。

「武蔵野！なんと言うさわやかな懐かしみあふれる文字だろう。そして、なんとという夢多い郷愁を誘う言葉だろう。親しまれ、懐かしがられた美しい武蔵野は日に日にその面影をなくし、惜しまれながら減びようとしている。国木田独歩の『武蔵野』は武蔵野の四季の自然の美しさ、ゆしさを書き尽くして余すところがない。かんてらの黒い油煙が立つて・・・などの一文の通り明治三十年頃の武蔵野には電灯がなかったに違いない。」

島田謹介写真集の撮影場所を見ると蘆花が青山高樹町から府下千歳村粕谷(現在の世田谷区西北部蘆花恒春園)に移り住んだ蘆花恒春園の残された雑木林などを好んだと思われる。他に平林寺(臨済宗妙心寺派佐伯養賢寺と同宗派)、深大寺、井之頭公園、所沢市、小金井市、多摩川などである。平林寺は写友が写真家となり写真集2冊を出版。多摩川は、源流から羽田飛行場までの138キロが会員の倶楽部写真展となり、東京銀座と大阪御堂筋で開催出来たことは、掛け替えのない思い出となっている。

独歩は徳富蘇峰の紹介、佐伯出身の矢野龍溪の推薦で鶴谷学館教師の口を勧められた年の、明治二十六年二月三日から『欺かざるの記』を起筆している。独歩自身もかつて民友社の先輩の蘆花の克明なノートを見たであろうし、島田謹介は独歩の『武蔵野』に感動した。私自身も蘆花の文章と島田謹介が日光で撮影した、『紅葉の十字路』に感動し、写真を始めるとききっかけとなった。いずれも自然大好きが、原点と思われるのである。熊本市の大江町にある徳富蘇峰、蘆花の展示館は、熊本市在勤時の自宅の直ぐ近くにあった。阿蘇大観峰は蘇峰の命名であることを知った。

ワカエビスカツギョ

若戎活魚センター

〒876-0801

佐伯市葛港1

TEL 0972-23-1773